慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	曹操の奸白臉とその色彩の選択について
Sub Title	About Cao Cao's Jian Bai Lian and the choice of its colors.
Author	李, 廷植(Lee, Jeong-Sik)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.69, (1995. 12) ,p.59- 77
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00690001-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

曹操の奸白臉とその色彩の選択について

李　廷植

I　始めに

一九五九年、中国で郭沫若（一八九二-一九七八）が曹操を肯定的に見る見方を提起したことがあった。当時、郭沫若の見解に応じて、戯曲[1]の中では顔を真っ白に塗った悪玉として登場するのを常とする曹操の臉譜（くまどり）を、うすい赤に塗るようになった時期があった。臉譜で顔を赤く塗るのは、ちょうど同じく『三国志』の中で忠義の象徴として一世を風靡した関羽のように、善玉の印だからである。もちろん、このようなことは激しい時代の流れに付き従って起きた一時的な現象に過ぎないと思われるかもしれないけれども、芸術というものはその時代の変化を反映しなければならないと主張する人々にとっては、一度は考察してみてもよい問題であろう。例えば「武帝紀」注に引く孫盛の『異同雑語』によると、かつて曹操自身が人物評を得意としたことで有名だった許邵に、「私はいったいいかなる人物か」と尋ねたのに対し、許邵は最初沈黙していたが強いられて、「あなたは治世の能臣、乱世の姦雄」と答えたところ、曹操はからからと笑った——とある。

また、後漢の霊帝の時、太尉となった橋玄も人物をみる眼があることで有名だったが、『世説新語』の「識監編」には、その橋玄の話しが次のように書かれている。

天下は乱れ、群雄は虎の如く争っている。これを収拾できるのは君をおいてあるまい。しかし、君はまことに乱世の英雄、治世の姦賊だなあ。残念ながら私はおいぼれてしまった。君の出世をこの眼で見ることはあるまい。どうか子孫をよろしく頼む。

曹操はその通りに後に天下に君臨した英傑であったのでこのようなエピソードが後人によって創られ、伝説として語られたとしても確かに不思議ではない。「乱世の英雄、治世の姦雄」とはけだし名言であるかも知れない。考えて見ればこのように形容される曹操の臉譜が「白粉臉」[2]になったり、「紅整臉」になったりするのも全然理屈に合わないことではないはずであろう。

そうしながらも、中国の戯曲の臉譜ではたぶんほとんどと言ってもいいくらい、操の顔にはいつも真っ白な化粧が施されている「奸白臉」であった[3]。つまり、いままでずっと否定的な面だけが強調されて来たのである。そのような傾向に素朴な疑問が生じた筆者は、本稿で曹操の臉譜である「奸白臉」をめぐって多角的に臉譜と色彩の選択、そして、その白色の意味と普遍性、さらに曹操が否定的、肯定的な両面の人格の持ち主であるのにもかかわらず、観客はどうして依然として白色の曹操だけが舞台上に登場することに興味を持ちつづけているのか、といった問題に対して検討してみたい。

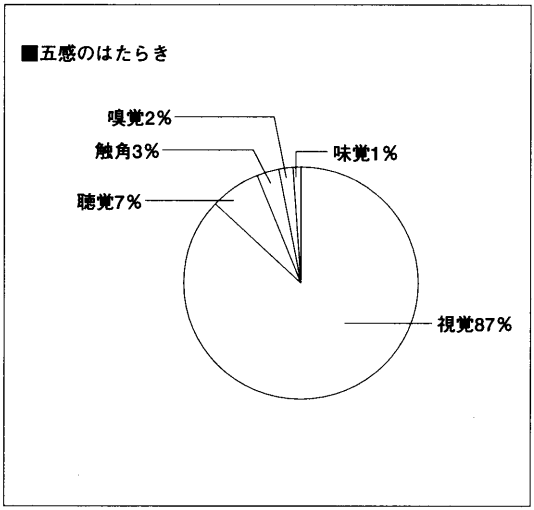
II　臉譜と色彩の選択

中国の戯曲は歌舞劇であるから、当然ながら歌舞の要素を多く含む。このため一般の歌舞劇と同じように、一定の形式を通じて意味を表わすことに重きが置かれている。秋文は「中国戯曲の芸術の美学問題」の中で

新劇の芸術は心理的な要素が感覚的な要素より重んじられる。しかし、戯曲では感覚的な要素の方が心理的な要素より重んじられる。心理的な要素は内容を決定し、感覚的な要素は形式を決定するのである。(4)

と述べている。このように色彩は直接に視覚へ訴えるので感覚的な要素に属しながら、一方、ひと目見ればわかるという長所があったことにより、昔から自然に戯曲芸術家たちの格別な注目を浴びたのであろう。

また視覚、つまり色彩と感覚の関係を端的に証明してくれる例として、例えば愛煙家ならば真っ暗やみの中で煙草を吸っちとしても、なんとなくうまくないと感じた経験があるであろう。その理由は次の図が示す通りに視覚が八七パーセントを占めるのに対し味覚はわずか一パーセントにすぎない。これは感覚の中で最も重要なのが視覚、つまり色彩であることを如実に説明してくれる



図①：野村順一『色の秘密』p39

のである。

戯曲の中で色彩を使って色々な役割をし、人物の造型に多く働くのは臉譜と衣装である。しかし、それらを少し比較してみれば、衣装が身分を表わす記号としての役割を持つのに対し、臉譜は登場人物の人品と性格を説明する記号となっていることに気がつく。臉譜の色の大部分は大体、人をほめたり、けなしたり、またそれが時間の流れに伴ってある色はほめる、ある色はけなす、またある色は別な意味を表わすことになって、最終的に観客と舞台との間には一種暗黙の了解が成立するのである。つまり、戯曲の芸術家と観客が色彩を使って対話をする一種の文化的な言語であるといえよう。例えば、曹操の邪悪な性格は「奸白臉」、張飛の率直で無鉄砲な性格は「黒臉」というに中国人の色彩に対する観念に基づいて表わされるのである。

そして、このような文化的な言語を生み出すのは、やはり中国民族と地域を基礎にした文化的背景であることは確かである。一般的に「色は客観的にみえて実は主観的なもの」[5]であり、好みの問題にも民族的理由があると考えられている。例えば西洋で赤い色の聖衣を着た主教は、宗教の世界で最高の地位を象徴するが、それは紅色が殉教者を意味する色であるからだといわれている。一方、中国では「紅妝」が若い女性の代名詞だが、これは古代から桃の花の色っぽい「紅」が女性の美しさを形容したという理由で、「旦」の役は今でもその基本色が桃の花の赤になっている。このように、人の色彩観は一定の時代あるいは地域的、社会的観念や人々の美的観念を反映する。そして、戯曲芸術家はいつも人物とストーリを表現するのに適当な臉譜の色彩を探求して来た。そして、彼らの色彩の選択は結局、その社会観念と美的観念によって決定されるものであって、戯曲の化粧が誇張し過ぎて「非人(人に非らず)」の程度まで施される。しかし、考えてみれば現実に臉譜のような化粧をした人間はいないはずだが、逆に、観客は「非人」の臉譜によって、その人物

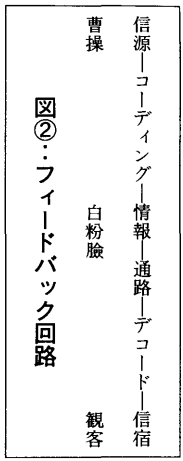
の性格、役割を一目で了解するのである。この原因は確かに役者と観客の色彩に対する理解が相通ずるからであり、冒頭、郭沫若の例を挙げたように、曹操の臉譜が「白色」になったり、「赤色」になったりするのは、臉譜の色がその時代に流行する社会観念と美的観念によって選択されるものであることを説明してくれる、もっとも典型的な例ではないかと考えられる。

では、ここでアメリカの数学家であるClaude Elwood Shannon（1916～　）の大衆伝達パターン論[6]を用いて曹操臉譜の色彩と観客との間に起こる、一種の非言語的な意味の伝達過程をもっと詳しく分析して見よう。

「信源」と「信宿」—これは「情報」の発信者と受信者である。つまり、発信者は曹操を演じる役者、そして、受信者は芝居を観る観客になる。

「情報」と「通路」—「情報」は或る具体的な内容を渡し届ける一組の符号を指すもので、伝播の過程の中で「信源」が「情報」を出すと「信宿」はこの「情報」に対する処理をし、反応を出すのである。ここで「情報」は長い眉毛で細い眼の真っ白な「奸白臉」である。また、「通路」は伝播の時、通過するある種の媒体あるいは個人間の直接的な交流である。例えば、劇場で曹操の臉譜をした役者とそれを観る観客の間には直接の交流という「通路」があるわけだし、それは色彩を見て感ずる視覚的なものである。

「コーディング」と「デコード」—「コーディング」は伝達したい内容を渡し届けるに適当な一種の道具及び予想している受け取り人の言語、或いはイメージに転化する作業を指す。「デコード」は転化した内容を再び還元し、それが含んでいる意味を理解することを言う。それで化粧の伝達にお



図②・フィードバック回路

いて「コーディング」は顔に色彩を塗る行為で非言語的な伝達に属するし、「デコード」は受信者の視覚及び脳裏の中に貯蔵されているイメージの視覚符号による解釈によって完成されるのである。即ち、細長い眉毛と眼、そして何よりも真っ白く塗った曹操の「奸白臉」は「コーディング」、昔から戯曲で悪人は、大体顔を白く塗って登場する習慣によって[7]「奸白臉」は不世出の奸臣の曹操であると解釈するのが「デコード」である。

このように役者が臉譜の色彩を言語にして「私は曹操である」「私はあなたたちがこの私を曹操と見てくれるのを期待している」と話し掛けて来たら、観客は軽く頷きながら「なるほど」「やっぱり曹操だな」と答えるであろう。

III 「白色」の様々な意味

地理学者でこの地上を覆っている自然の色についてもっとも注意しなければならないと主張したのは、ペーター・シュミツトであった。彼は、「各地域の支配的な色はその地域全体の印象を決定する。それは気候の作用、土壌或いは高度などにもとづく[8]」のだから色というものはその民族においては「いろいろな経験の表現として示される。従って民族の言語でもそれが明瞭である」と述べている[9]。

つまり、その民族が特定な色に与えた呼び名、即ち色名はその色を人間が認知したという証明であるばかりでなく、その色に対する社会的評価連想や象徴など、いわゆる文化的背景について様々な事実を物語ってくれると考えられるその代表的な例が、虹の色に関することではないかと思う。日本や韓国では七色——赤、橙、黄、藍、青、緑、紫とするが英語文化圏では、上記日本の七色から藍を除いた六色であり、メキシコ原住民であるマヤ族は黒、白、赤、黄、青の五色に分ける。そして偶然、マヤ族の五色は、日本の昔の色彩語彙と同じなのである[10]。元来、五色の観念は中国からき

たものであり、五色の雲などというが、『荀子』には「真に学問をきわめると、目は、青、赤、白、黄、黒の五つの美しい色彩にとらわれなくなる」ということが書かれている。

また、一年中を雪や氷に囲まれて生活するエスキモー人は、我々が「白い」とひと言で表現してしまう色でも、数十の言葉で表現するという。他の民族にくらべて、白という色の色彩語彙が非常に豊富なのだ。

これは、多分エスキモー人の生活環境によるものであろう。いつも雪や氷という白一色の世界に住んでいる彼らは、同じ白でも様々に見分けることができるのである。

また、白は白磁の陶器一つだけを考えても中国北宋時代の冷たく厳しい白と、李氏朝鮮の暖かい白と、鍋島のやや青味がかった複雑な白など、実に様々である。

先ず韓国でも白は[11]、中国の五行説の影響を受けて、古代から五行説にちなむ青、朱、白、黒、黄の五色の一つであるとともに、明るい白昼と太陽を表わす色である。そのせいか特に韓民族は白を好み、白を文化的にはぐくんできたようである。よごれやすいのにもかかわらず、農民は純白の野良着で働く。また、韓国語で「白水」とは、清廉潔白の意である。その一方、彼らは葬式の時には白い喪服をきる。すでに、古朝鮮時代の『三国志・魏誌扶余伝』に、「喪に服する間は、男女ともに純白の着物をつける。」とある。だが白を弔意の表現に用いる民族は韓民族に限らない。

その一方、妖女をたとえて「白狐」というのは、やはりあやしく邪悪であるという味もあるのだ。

日本でも、人が死ぬと白い綿帽子をかぶる地域があり、また、北陸には現在までも白い喪服を着る伝統が生きているらしい。もともと、白には清浄無垢という意味と、忌み色の忌みとの両方があったけれども、明治以後は白を清浄無垢とし、黒を悪や喪色とする西欧文化の伝統の影響を受けて喪に黒を着るようになった。さらに、結婚式の時、白を着る

のはやはり西洋の影響だと多田道太郎氏は指摘している。[12]

古代日本では、白は人工の色彩が加わらない素の状態を指した。これはたとえば、『古事記』の「稲羽之素兎」や『日本書記』の敗戦の賊が揚げる印である「素幡」という表現からもあきらからである。ここで言う「素」は無色、つまり「白い色」であったのだろう。

一方、歌舞伎の隈取りは中国戯曲の臉譜に似ているが、演劇評論家の戸板康二氏は白色の使い方に対して「適役は御家狂言で、その陰謀をもって劇を進行するはしらにさえなっているが最高の悪人は真っ白に塗っており、その部下の端(はか)敵(たき)は、赤く塗る」と説明している(『歌舞伎』、一保育社)。この「白」は、曹操の「奸白臉」と一脈相通ずるところがあるようだ。

やはり、西洋でも白は表面的に調査してみる限りネガティブな連想は出てこない。ところが、清潔、純粋、神聖な白の裏に、実は妖影がさしている。ハーマン・メルヴィルは『白鯨』の一章を割いて、白が恐怖、戦慄、死霊、落魄を宿していることを論じている。死装束を思い出せばよいだろう。

では、古代中国で五色の一つであった白色について考えてみよう。先ず、白色と吉凶との結びつきにはおもしろい例がある。今世紀の初め頃、西洋人が中国の風俗習慣について書いた本の中で、中国では白は不吉な色であるから、中国に於いては西洋のように花嫁が純白のウェディングドレスを着るような習俗は導入されないであろうという予言をしている(大林太郎外共著、「色の象徴と変容」、『色』、ポーラ文化研究所)。ところがこの予言は見事にはずれ、今、台湾と中国へ行けば、台北や上海といった大都市のどこへ行っても、ブチィックの店頭に白いウェディングドレスが飾ってあり実際多くの中国人が白いドレスで結婚式を挙げる。これは白いウェディングドレスに違和感を感じないという証拠で

あり、民族的な固有の色の観念といっても、かわりうるというわけであろう。

確かに、古代中国では、白は不吉・不幸を、黒は吉を象徴し、白は葬儀に、黒は祭事や結婚などに使われていたらしい。『論語』の「郷党編」には、

古礼の服たる黒羊の皮衣と黒の冠という礼装では弔いはしない。

とあり、その疎に：

裘は、黒い羊の毛皮で作った革衣である。ゆえに、黒の上衣をぬいで肩を出して（中略）素（しろ）は凶を主管し、玄くろは吉を主管する。それで、黒羊の革衣と黒の冠では弔問しないのである。

と記している。「玄」は天の色であり、天に従うがさいわいになるので、黒色を祭事に用いたのである。では、なぜ「白色」が凶を主管するのであろうか。『礼記』の「檀弓編」は、

何の飾りもないのを素という。正真の哀痛の感情は何の飾りもないものである。

と記している。それで、何の飾りもない「白色」は、人が死ぬと「生きている者は、哀痛の心情を持つ（生者有哀素之心）」気持ちを表わすようになった。これ以外にも上のような習俗は、多分鬼神に喜ばれようと努めたことと関係があるらしい。例えば、人が死ぬとその人のことを「上西天」というが五方説[13]によると西方の神霊もやはり白色である。西方で巣くっている神霊白虎は、禍害と死亡を主管する凶神である。『協紀方書』には、

白い虎は、一年中の凶神で、いつも四季の後ろに巣くっている。

という記録がある。

白色は後世になっても依然として凶事を主管したけれども、祭事などには次第に赤色が使われるようになった。これ

は、おそらく赤色の巫術意義が関係あると思われる。北京の周口店から発見された「北京原人」は、死体の傍に丸く赤い鉄礦粉が撒かれていたが、これは赤色の鉄礦粉で死者の霊魂を保護しようとしたものと考えられている。また、『礼記』の「檀弓編」に

　柩衣で覆って、棺は赤い材質で

とあり、疎に：

　赤い布で柩衣をして棺を覆って葬儀を行なう

と言っていることから、先秦時代に漢族はすでに赤い布を用いて棺を覆いかぶせたり、棺椁を赤くする習慣があったことがわかるが、他にも殷墟で出土した棺木の残品にも赤色を塗った痕跡がある。このような方法は美観の為ではなく、赤には魔よけをする神秘的な力と死者の霊魂を保護する機能があると考えられていたことによる。赤色はまた死者だけではなく、生きている者も保護すると考えられた。このためお祝いや宮殿・寺院の壁にも赤色を用いた。中国では現在でも、白と赤が対立する概念として考えられており、めでたいことは赤で表わしている。例えば、結婚式をするのを「辦紅事」[14]或いは「辦喜事」と言い、その時に贈る祝い金を「紅包」と呼ぶ。また、合格者や表彰物などを発表する掲示板は「紅榜」である。正月や誕生日にもちろん赤を使う。これに対し、人が死んだ時に使われる色が白なのである。このような白と赤の対比は戯曲においては白の曹操と赤の関羽として生かされるわけである。

　以下に白の色々な用法を挙げてみよう。昔、無位無官の庶民を「白人」或いは「白丁俗客」といった。明代・無名氏の戯曲『殿京四郡』第一折には

　白丁俗客の往来はなく、ただ才子と佳賢の談笑があるだけ。

とある。また、青白いインテリや世故に通じない書生を指して「白面書生」、「白衣秀士」というとか、素人を「白帽子」あるいは、青二才を「白臉」といった。そして、根も葉もない奇怪なことを「白日見鬼」、実現できない幻想を「白日夢」という。また、「黒白」は昼と夜、「黒白分名」、「黒白不分」のように正と邪、善と悪を意味する。

『詩経』の「小雅・白駒」には「真白き駒、深き谷間に」とあり、ここでので「白駒」は、白い子馬の意味で賢能な者を比喩する。つまり、白駒が深き谷間にいるというのは、賢才が在野にいて朝廷に仕えない状態を指す。また、「周頌・有客」の「まろうどまろうどよ、さてもその白き馬」と同じく「周頌・振鷺」の「白鷺群れ飛ぶ、西辺の沢」に見える「白」の用法も、ほぼ「真白き駒」に通じるし、『礼記』の「檀弓編」にも「殷人は白を尊び、軍には白い馬戦に乗る」といっている。

あの有名な「白眉」は、兄弟または同類中でひとり傑出したものを意味する。『三国志』の「馬氏の兄弟は五人、いずれも才能があるが、その中で白眉がもっともよい」がその出典である。そして、否定的な意味を持つ白色としては「白色政権」が反革命、「白色恐怖」は白色テロ、「白森々」は冷たく白いさまの意味を含んでいる。

以上のように白色は、それこそ無数の解釈が可能である。素直さ、無、空虚、冷たさ、純粋さ、清らかさ、神聖、悲しさ、不安、死……などの無限の変化を内包し、絶対矛盾をひそませている。

そうしながらも中国戯曲の臉譜では、赤色は忠勇、黒色は剛直、緑色は強暴などを表わすという無言の約束があって、邪悪、悪賢い、偽り、陰険、邪悪な奸臣、悪党、片意地で勝手、卑劣で狭量な無頼の徒には白色を塗る。例えば、曹操、秦檜、厳高費無極、高登、孫権、司馬懿、馬謖、趙尚、伯喜否などがこの系列に属している。とは言っても白色がすべて悪評の意味を持つわけではない、例えば、『十五貫』で「丑」の婁阿鼠などは、鼻柱の部分を白く塗るけれど、或る時

は貶す、しかし或る時は、ただ言葉のユーモアと行動の面白おかしさだけを表現しているにすぎない。

IV　曹操の人格の両面性

さて、果たして曹操がほんとうにそんなに否定的な面だけを強調されるべき人物（悪玉）であるのか、そうでなければどのような肯定的な面を持っているのか、その両面性について考えてみたい。

中国歴代の有名な人物の中で「文武双全」という言葉が最もふさわしいのが曹操ではないかと思われる。正史『三国志』の著者陳寿の表現を借りれば「非常の人、超世の傑」であった。そのような曹操は若い頃、かなり自由奔放な生活を送っていたと言う。「武帝紀」には、「太祖（曹操）少（わか）くして機警、権数、しかれども任侠放蕩、行業を治めず」とある。「任侠放蕩」、つまり、無頼の徒のような行動をしていたらしい。

ここで、興味深いのは、曹操が無頼放埒な生活の中で、武芸と学問を立派に身につけていたということである。その武芸は群を抜き、彼を傷つけられる者はいなかったといわれる。また、彼は群書を博覧し、特に兵法を好み、後に諸家の兵法を集めて、『接要』という一書を撰したが、孫武の兵法に注釈を施した書十三篇を著しており、その一部は今日に伝えられている。彼は二十歳余りで議郎（官名）に任ぜられているが、そのことからも彼の学識がなみなみならぬものであり、若くして世に認められていたことがわかる。更に彼は建安（紀一九六―二二〇）の詩壇を代表する大詩人であり、同時に書家としても有名であった。また音楽も囲碁も、当時の名人上手に比べてひけをとらなかったという。彼の作品の中でもっとも有名なのは「短歌行」であり『演義』の第四十八回には「長江に宴して曹操詩を賦（ふ）し、戦船を鎖（つな）いで北軍、武を用う」とある。赤壁の戦いを前に曹操が諸将を集めて宴会をし、その席上、自分はこの槊（さく）（武器の一つ）

を持って戦って来たが、今日は槊を横たえて詩を賦そう、と言って「短歌行」なる詩を詠んだというのである。

こうした曹操の面目を宋の詩人蘇軾は

月明かに星稀に、烏鵲南に飛ぶとは、此れ曹孟徳の詩に非ずや。（中略）槊を横たえて詩を賦せるのは、固より一世の雄なり、しこうして今、いずくにか在るや（「前赤壁賦」）

と評している。

また魯迅は、曹操の文学について次のように評価している。

曹操は通説を力説した。通説とは、勝手気ままということだ。この提唱が文壇に影響を及ぼして、言いたいことをそのまま言う文章が多量に生み出されたわけである。思想が通説になり、頑固がとりのぞかれたおかげで、異端と外来の思想を十分にうけ入れることができ、そこで、孔子教以外の思想が続々と吸収されたのである。（中略）彼はたいへん胆の大きな人だったが文章は通説から力を得ている点が少なくない。文章を書くときにも気がねをしないで書きたいことをそのまま書いている（「魏晋の気風及び文章と酒と薬との関係について」）

魯迅はここで、曹操の文人としての清新自由な気質が、政治家及び戦略家として発揮した彼の積極的な政策に一脈相通じるものである点を指摘しているのである。

曹操は後漢末期、魏公・魏王として中原で実権を握ってから、その都鄴（ぎょう）（河南省）に天下の優れた文人、詩人を集めた。また彼の二人の息子、丕、植も共に一時代を代表する文学的才能の持ち主であったので、曹操の周囲には中国文学史上稀にみる華やかな文学集団が形成された。この建安詩壇は、やがて到来する六朝時代の文学を特徴づける、貴族を中心とする文学集団のさきがけを成すものでもあった。

曹操はこのように、文武を兼ね備えた異能の人であった。しかしその一方で、悪玉としての彼の凄まじさが遺憾なく発揮された代表的な例があの有名な「呂氏一家殺害事件」である。この一件は、曹操を稀代の悪玉、不具戴天の仇役に仕立て上げようとする通俗小説や芝居の作家らにとって、まことにうってつけの材料を提供したのであった。曹操が董卓の暗殺に失敗して人目を避けて逃げた時、父の友人である呂伯奢という者の家に立ち寄った。記録によれば、彼はここでこの一家をみな殺しにしてしまったのである。さて、そのいきさつは(15)

一、『魏書』の記録。操が呂家に立ち寄ったところ主人の伯奢は不在で、その子と居候らが操を脅して馬や荷物を強奪しようとした。そこでやむを得ず家族ら数人を斬り殺したとする説。

二、『世説』の記録。操が呂家に立ち寄った時伯奢は留守で、五人の子供が操を丁重にもてなした。しかし、曹操は董卓の命を拒否したうしろめたさから、彼らに謀殺されるのではないかと疑心を生じ、夜半に八人を斬殺して逃げたとする説。

三、孫盛の『雑語』の記録。呂家の台所から聞こえて来た食器の音を、武器の音と勘ちがいした曹操が、家族をみな殺しにした。あとで誤解だったと気づくと、彼は一瞬顔面蒼白となつたが、「たとえ人を裏切ることがあっても、人に裏切られてはならぬのだ」と言い放ったとする説。

以上の三種の逸話のうち、『演義』は第一項の説を無視して第二、三項を取り上げ、いつも「白色」を塗る曹操の悪玉像を造りげようとしたのだが(16)、これに対し立間祥介氏は「このように陰（マイナス）の面を描くことで、かえって曹操の人間性が立体的に描きだされることになったのは、怪我の功名」という興味深い考察をされている。この話は、京劇「捉放曹」にも仕組まれ、残虐非道なる曹操像はいやがうえにも民衆の脳裏に焼き付けられることとなったのである。

また、『曹瞞伝』には曹操の戦陣におけるエピソードが記されている。ある時、陣中の糧食が不足して苦しんだ時、曹操はそっと係の者に「どうしたものだろう」と尋ねた。その者は「小さなます目で計って、足りるようにすればよろしゅうございましょう」と答え、曹操はその通りにした。ところが軍中に曹操は小さいます目を使って人々をごまかしているという声が上がったのを聞くと、例の糧食係を呼び「ここのところはおまえに死んでもらって人々の不満をしずめようと思う。そうでなければ事態は解消しない」といって斬ってしまった。

斬られた側からいえば、主人の危機を救うためにあえて斬られたという理屈になるかも知れないが、やはり手のひらを返すような曹操の態度にはやりきれぬものがある。『曹瞞伝』の筆者はこの話をしめくくって、「残酷でかけひきの巧みなこと、万事にこの調子だ」と決めつけている。

また、ある戦いで飲み水がなくなった。近くには川も見当たらない。兵士たちはのどがかわいてたまらなくなつた。曹操はどなった。「向こうに大きな梅林がある。甘酸っぱい実がどっさりなっているから、それを食べれば渇きをいやせるぞ」、それを聞いたとたん兵士たちの口の中には唾が溢れ出て、部隊はなんとか前方の水源にまで辿り着くことができたのであった。

この「青梅止渇」の話は『世説新語』の「仮譎篇」（「仮譎（かきつ）」とは、人を騙したりぺてんにかける意）に見えているから、『世説新語』の著者もまた、曹操の他人を騙すことが巧みでずるかしこかった、という特徴にピントを合わせて記述しようとしているようだ。

以上のような話を根拠にした曹操の悪玉説に対する総合評価は、竹田晃氏の鋭い見解が最も相応しいと思われるので、それを引用して以上の結論にしたい。

これらを、ただ、残酷だ、ずるかしこい、とかたづけてしまってはいかにも身も蓋もなくなってしまう。大事のためには、たとえ、貴重な人命を犠牲にしてはばからない人の信頼を裏切ってもやむをえないとする冷静、いや冷酷なまでの決断力、法に対する厳正な態度、一軍の将としての抜群の統率力、さらにその裏にうかがわれる縦横の機転、そして大衆の心をつかむ巧みなジェスチュア（中略）いずれをとってもまことに乱世の姦雄の名をほしいままにする操ならではのエピソードである。

V　おわりに

以上に述べてきたように曹操は極めて相違した両面性の人格を持つ異能の才人であるにもかかわらず、戯曲ではなぜその否定的な面だけが強調され、また、観客らはなぜ「白色」の曹操だけを好むのか、筆者なりにその理由を考えてみたい。

先ず、それは「三国志」に関するあらゆる小説と芝居の中でいつも忠義の象徴である「赤色」の関羽と「白色」で悪玉の化身である曹操の対立的な位置に由来するものではないかということである。その例として、小説『三国志演義』では、関羽の人柄と武通にほれこんだ曹操が、なんとかして関羽を自分のもとに置きたいと考え、初め関羽が劉備の妻子と共に捕まえられ許昌の曹操のもとに送られることになった時、曹操は途中で宿をとる際わざと関羽と劉備妻子に一部屋しか与えないように命令した。関羽が劉備の妻と一つの部屋で夜を共にさせて不義の噂を立て、関羽が二度と劉備のもとに帰ることのできないようにしてやろうとたくらんだのである。しかし関羽は一晩中部屋の外に立ち、一睡もせずに見張りの役を努め続けたため、曹操の女交猾な思惑はみごとにはずされてしまった。また、後に関羽が袁紹の陣中

にいる劉備のもとへ脱出した時、側近の部将らがそれを追おうとするのを抑え、「追うな。あいつはあいつで主人のためにつくそうとしているのだ」と言いながら心密かにその志をたたえ道義を成就させたのであった。この行動はまさに「英雄知英雄」というべきで、このように絡み合う二人の対立関係は永遠のライバルの関係[17]であるからこそ、観客の興味を引きつけるのである。

次に考えられるのは、色と配色に対する習慣的な観念である。戯曲舞台で「赤色」はお祝い、忠誠、勇敢を、「白色」は奸邪、死亡などを表わすのは、広範な大衆が長い間見慣れたことによって定まった色彩に対する伝統的な習慣から可能なのである。もし、白色が凶を主管するという習慣的な観念が無かったならば、曹操の顔に「白色」を塗っても何ら説得力を持たないだろう。そして我々の体験として見慣れた色の配列、馴染みのある配色には、一般に不快感を持たない。例えば、臉譜の中でいわゆる「桃園型」というのがあって、それぞれ曹操、関羽、張飛のことを指している。その配色が、白（曹操）と赤（関羽）の彩度対比、それぞれ白（曹操）と黒（張飛）の明度対比という伝統的な配色美の最上の規範がある。もちろんなじみの原理に基づく配色に、絶対的な普遍性があるわけではないが、中国の風土や文化によって形成された独特な色彩の習慣が、戯曲舞台の色彩言語に個性溢れる機能を与えたのは確かであろう。

TAT（Thematic Apperception Test 絵画統覚検査）という面白い心理テストは、人物の登場する絵を見せながら物語りを作らせる。最後の一枚は全くの白紙であるが、やはりそれを見て一編の物語りを作らなくてはならない。人はそうした場合、自分の心の奥底に潜んでいる欲望と葛藤を絵や白紙に投影してみる。その投影された心を読み取り解釈しようというのがこのテストの目的である。それはまるで、舞台の上から曹操が我々観客に与えるところの「白紙」にわれわれ自分の心に宿っている欲望や期待を用いて彩っているのではないかと思う。この世の中の観客も普通の人間と

して、悪くて強い曹操を憎みながらも、自分の潜在意識に潜んでいる表現しえぬ欲望を実現するために、文武を兼備した異能の才人である「白色」の操が好きだという矛盾を含んでいるのではないか。つまり、我々平凡な観客は、曹操の単純で真っ白な「奸白臉」の裏に隠れている、決して平凡ではない意味を読み取るのが好きなのではなかろうか。

注

（1）本稿に於いて「戯曲」という言葉は京劇を始め、西安の秦腔、上海の越劇、南京の昆劇、広東の奥劇などで、いわゆる伝統演劇として中国の各地方で上演されている、古典劇を指す総称の意味である。

（2）「白整臉」以外にも曹操の臉譜を指す言葉に「大白臉」、「奸白臉」、「白整臉」、「笑刀臉」などがある。ところで、中国の俚諺「満面春風裏刀」、「不怕曹操暴、就怕曹操笑」、また、現在でも蘇州人が喧嘩を始めるとしばしば口に出す「倷弗要凶、倷弗要狠、倷経不住人家一笑」、また、「皮笑肉不笑、殺人不見血」と「両面三刀」という言葉の通りに、曹操の鼻の両側に常に三つの刀が描かれていることから、筆者は「笑刀臉」が操のイメージを表わすのにもっとも似合うのではないかと思う。

（3）その例外である「文姫入塞」では「老生」の役だから「奸白臉」の化粧を施さない。また、「灞橋挑袍」、「関雲長義勇辞金」、「中郎女」なども同様である。

（4）『文芸論叢』第一二集、上海文芸出版社、一九八一年

（5）別技篤彦『服装の地理』、玉川大学出版部、一九七五年

（6）徐家華「生活的面具」（『戯劇芸術』、一九九四年）

（7）斎如山氏の『国劇芸術彙考』を見るとその例として曹操以外にも李自成、張戯忠、陳友諒、安殿保、田承嗣、楊阜などを挙げている。

（8）ペータ・シュミット『哲学的地理学』、一九六八年

（9）山口昌男『黒の人類学』、一九六八年

(10) 村山貞也氏は『人はなぜ色にこだわるか』でその根拠として次のように記述している
『竹取物語』でかぐや姫が、求婚してきた五人の貴公子の一人、大伴大納に出した要求は「竜の首に五色の光る玉あり。それを取りて賜え」であった。

(11) 東洋の儒教文化圏でありながら、同じく漢字と箸を使っている上に五色の観念の影響を受けてきた韓国と日本の白に対する伝統的な観念及び曹操の真っ白な顔を見た時浮かべられるイメージは、いったいいかなるものであろうか、また、その類似点と相違点にも好奇心を感じたので少し調べて見た。

(12) 塚田　敢『色彩の美学』、紀国屋書店、一九七六年

(13) 五方の神霊は、各々「東は蒼竜、南は朱鳥、中は黄竜、西は白虎、北は玄武」である。

(14) それに反して、葬儀、追悼会、年忌などを営むことを「辦白事」という。

(15) 竹田　晃『三国志の英傑』、講談社、一九九〇年

(16) その代表的な例として、呉の人が敵国である魏の曹操のことを悪く言おうとして書いた『曹瞞伝』を挙げれる。

(17) もともと、英語の Rival の語源が River で、一流れの水源の両岸に住んでお互いに川を共有しながら競争し合う関係に置いてある人を指すのを思い出せば、もっと理解し易い。